

生活しやすい環境づくりを求めて

～こだわりのある子が生活を楽しむために～

岡村 清

はじめに

小学部6年に転入したD男の障害はてんかんで、実に様々なこだわりを示した。学校生活の流れに何とか乗ってくれないかと願うが、こだわっていることを禁止すると大声を出したり、大の字にひっくり返ったりする行動が見られ手をこまねいた。その一方で、にこにこ会話を楽しむ場面も多く、こだわる場面とのギャップを理解しかねた。そこで「こだわり」を止めるのでなく「好きなこと」として生活に生かしていくよう発想の転換を図るとともに、周囲がどこまで本児に合わせた生活しやすい環境（折り合い）がつかれるか考えることにした。折り合いの基準は、「本児と共にいることが楽しいと感じる」こととした。ここでは、折り合いを求めて取り組んでいった支援の実際を述べたい。また、折り合いをつけた生活を楽しむ中で、成長をとげる道筋についても考えていくことにした。

1 プロフィール

- (1) 生育歴
- ・昭和61年1月生 小学部6年 男子 てんかん
 - ・5年生まで障害児学級在籍。 ・6年生で本校転入。

(2) 諸検査等による実態

表-13 遠城寺式乳幼児発達検査 (H9. 4月実施)

移動運動	手の運動	基本的習慣	対人関係	発語	言語理解
3:8~4:0	4:0~4:4	4:4~4:8	3:4~3:8	3:4~3:8	3:8~4:0

表-14 新版K式発達検査 (H9. 4.21 5.12実施)

認知・適応(C-A)	言語・社会(L-S)	全領域(平均)
3:5	3:5	3:5

(3) 生活を楽しんでいる姿・楽しめない姿および行動特性

〈行動特性〉

様々なこだわりのために、次の行動に移りにくく「いや」と言い続け、周囲と摩擦を生む。共感を楽しむ表情から急変し「いや」と言い続けることもある。共感関係ができてくれば、歩み寄りながらお互いの行動を形作っていくものであるが、二人の間に壁ができてしまったと思える瞬間がある。全く本児のみの世界で行動していると感じることがある。ただ、次の行動に移ってほしいときに「これしたらおわり」ということばで納得することがある。自分で「これしてから～する」と言うこともある。相手の気持ちを取り込み、こだわる自分をなんとかコントロールしようとしているのかもしれない。

〈楽しむ姿〉

一人の楽しみは、なぞりがき、整頓、パズル、バス、自転車、ゲームで、自分の楽し

みを周囲と共感する場面は、トランプ、給食、遊具、ウサギ小屋、ダンス、太鼓等である。

〈楽しめない姿〉

やっていることを周囲に止められ、大声を出したり大の字に寝そべったりする。また、やっていることがやめられず、自分で苦しむことがある。

2 取り組みの構想

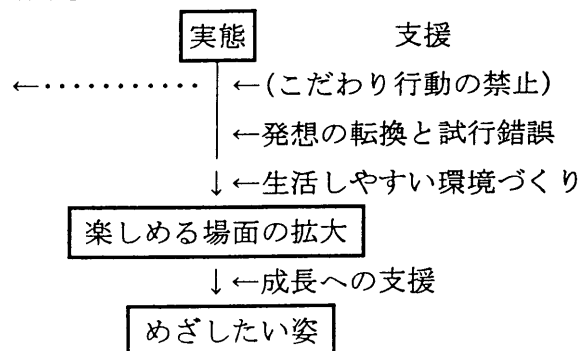
(1) めざしたい姿

- ・皆と一緒に学習や遊びに取り組む子
- ・新たな課題に挑戦する子

(2) 取り組みの仮説

本児に周囲が合わせて、環境を整えることで本児は過ごしやすくなる。しかし、本児に合わせすぎるとTPOが合わなくなり、周囲に迷惑がかかることがある。本児の満足と、我々が許せるぎりぎりの線で、生活をつくっていく。同じ事を繰り返していて発展がない場合、少々の葛藤があっても新しい興味を知らせる。そして本児の喜び、生活の選択肢を拡げ、みんなと一緒に活動を増やすことが、本人も周囲も共に生活を楽しむことである。

何とか皆と同じ行動をして欲しいという願いから、強引にこだわりをやめさせようとしたり次の場所へ移動させようとした。しかし学校中に響くような大声を上げたり、いつまでも寝そべったりで、それは教師との共感関係どころか敵対関係になる恐れを感じて強引な禁止はやめた。



(3) 具体的な支援の方針

①生活しやすい環境づくり

〈共感関係の構築〉

- ・本児の好きなことで担任との応答の楽しさを共有し、共同行動を多くする。
- ・本児の方から、共感を求めてくる場面につきあい、大人側の気持ちを伝える。

〈発想の転換と環境づくり〉

- ・「こだわり」を可能な限り「楽しみ」として認められるように周りの環境を整える。
- ・個別的な対応もできるよう、担任の支援体制を整えると共に、周囲への理解を促す。

②成長への支援のために

- ・「苦しいこだわり」からの脱出を支援する。
- ・次の楽しみへ移行し、新たな楽しみを伝えるための支援方法を工夫する。

3 支援の実際と考察

ここでは取り組みの仮説に基づき、悩みながら実践した足跡をエピソードとして載せる。

(1) 共感関係の構築 = 全ての基本は共感関係づくり =

- 「おいしいね、おいしいね、おいしいね、おいしいね・・・」

いやなときに拒否の言葉を言い続けることばかりではなく、にこにこしながら「おいしいね。」と共感的な言葉をひたすら言い続けることもある。最初はいい気分の担任もやがてうんざりしてくる。比較的少ない回数で言い終えたのは、じっくり、本児を見て、ゆっくり返事をするのであった。

「ことばが、頭になかなかとどかないんじゃない？」と言う人もあった。そうかもしれないし、気持ちが本児に伝わるための、独特のタイミングがあるようにも思った。「私も同じ気持ちだよ」という思いを本児に投げるようにゆっくり言うと満足することから、普段いかに気持ちを込めずいい加減に応答していたかが反省させられる。

(2) 発想の転換と環境づくり

＝こだわりを否定的にとらえるのではなく、逆にこだわりを生かす発想への転換＝

○「こだわり」で、ほめられた！

プール掃除のとき、最初から最後まで1時間近くたわしで床をこすり続ける姿に、担当の先生から「学校中で一番熱心でした。」とほめられた。また、毎日の教室掃除で、雑巾がけを、時間いっぱい熱心に行っている姿は大変好ましい。他にも「夏だ！夏だ！」の単元で担任が苦勞して作った「とぼしゲーム」に、にこにこしながら熱中して取り組んだ。的のかごにうまく玉を入れようと試行錯誤する姿にも感心した。担任は大きな喜びであった。心が通い合ったとも思った。

掃除時間が終わり学習時間が始まっても、掃除を続けているのは困る。もし担任が望まない遊びなら、本児がいくらにこにこしていても担任は喜ばない。1時間以上もやり続け、最後は汗をたらし、こだわりから抜けられず苦しそうな表情を見せることもある。こだわりを生かせる環境づくりに取り組むとともに、TPOを調整することも必要であった。

＝急がせることから、ペースを合わせることへ＝

○ゆっくり、ひたすらゆっくり

大好きなトランプの相手をしたいのはやまやまだが「ドーナツ」は並べるだけで、「七並べ」は、配るだけで休憩時間が終わってしまう。午後の学習が始まる頃に「一緒にしよう」と言い、トランプは学習をじゃまする存在となってしまう。学習をトランプに変更したり、学習が始まるまでにやり終えるような時間帯からトランプに誘ったりした。

思考や運動企画に時間がかかるのは、てんかんの脳波の嵐のためであろう。せかしても急いでくれないのなら、本児のペースに合わせる必要があった。ただし、転校してきた当時、着替えもひたすらゆっくりであったが、今は結構速いと感じる。毎日繰り返すことはするようになる。そして、担任も喜ぶ。新しい課題に取り組む際にゆったり待てる時間をつくり出すためには、速くできる活動を増やしていくこともまた必要であった。

(3) 成長への支援

＝笑顔での気持ちの切り替えを支援し、新しいことにも挑戦＝

○「うそだよー」

修学旅行のおやつ時間、本児は、みんなにおやつを配って回った。○子にあげた後、今度は逆に○子のおやつを真剣な表情で「ちょうだい」と言い始めた。また、いつものこだわりが始まったと誰もが思った。ところが11回もそう言った後、振り向きざまににっこ

りして「うっそだ！」と言う。大人は異口同音「これは何だ!？」

相手の気持ちを察して、笑顔や冗談で気持ちや行動を切り替えたということであろう。

○「おもしろかったなあ」

3組みんなが太鼓の練習。三輪車に乗っていて練習に行こうとしない。担任が担いで連れて行くが大声で騒ぎまくる。太鼓を目の前にしてばちを持たされても放り投げ、そのまま座っていた。練習が終り、みんながいなくなった後で担任が素手で太鼓をたたいてみせると、寄ってきた。あちこちの太鼓を担当と一緒にたたいて回る。そのうち、ばちを手渡すとたたき始めた。ミラリングとモデリングの繰り返し。簡単なリズムをたたくようになった。そして「太鼓、おもしろかったなあ。」と何度も言った。数日後、ステージで劇練習が始まるのに「ノートに丸を書く!」と言って行こうとしない。練習開始後も一人教室で書き続けている。劇に太鼓をたたく場面があるため「太鼓たたこうよ。」と言い残して担任は教室から去る。しばらくすると、体育館に来て練習に参加していた。

初めて経験する内容では、なかなか参加できないが、その場にいるだけでも雰囲気を見ている。自分の活動のリズムに合いそのような内容や楽しそうな活動の場合、今やっている事をやめて次の活動に移ろうとする。楽しかった思い出をイメージ出来ることばで話しかけることが、大切であると感じる。また、一緒に楽しんだ思い出を積み重ねることで、新しい誘いにも乗ろうという気持ちを高めるのではないか。



「太鼓、おもしろかったなあ」

4 実践の考察と今後の課題

(1) 研究テーマに関する考察

今回の「生活を楽しむ」という研究テーマがなければ、単にこだわりの強い子、わがままな子ととらえていたかもしれない。研究の3年目に本児が転入してきたということで、本児を学校に合わせるのではなく、本児に合わせた環境を作ろうという取り組みができたと思う。もし、担任個人だけが子どもに寄り添いQOL的な発想をしても、ここまでの楽しむ姿は見られなかったであろう。学校全体が取り組むことで、我々は子どもの側にかなり歩み寄れるようになったのではないかと思う。

(2) 本児の今後の課題

自分づくりの段階や障害から来る特性を基に、思考の過程を探り、可能な限り自己活動を大切にす支援をさらに考えていく。本児は自己-他者の分離が出来始めているが不十分であり、相手の気持ちを自分の行動に反映させたとき、相手が喜び、自分もうれしいということに気づかせたい。登校時間を早くすることは、環境調整のみならず薬でも可能か、生活習慣と薬の関係を、探っていきたい。このことは特に主治医との連携が重要となる。保護者の願いや、これから進む中学部と共通の価値づくりをし、将来像を考えていきたい。